
転生先はインフィニットストラトス (リメイク)

古手雅樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生先はインフィニットストラトス（リメイク）

【Nコード】

N3354X

【作者名】

古手雅樹

【あらすじ】

この作は1作目の転生先はインフィニット・ストラトスのリメイク版です

今回は乗る機体など制限されてますが基本は旧作と同じです

まあ多少変わりますが大丈夫か？

作者 大丈夫だ問題はない（あ・・・これフラグだわ）

とらこ餅でいらねえよーん

転生先はI sの世界

俺の名前は古手雅樹、高校受験が終わり現在帰宅中

そして現在駅のホーム

古手「あーつかれた帰ってI sみてーな小説も買わなきゃ・・・
あとカプセルファイターの機体も育成しないといけないし・・・
時間をくれ」

『まもなく3番線に電車が通過します白線の内側までお下がりください』

ぷわーん

古手「おっと・・・通過か白線白線・・・」

「きゃあああ誰か！誰かあのこを助けて！」

古手「なに！畜生！こんなときに！誰か！非常スイッチ押せ！」

古手は線路に降りて落ちた人を助ける

古手「くそっ！間に合うか？・・・いや！間に合う！」

古手はとっさに子供を拾い上げホームに戻すしかし

ぷわーんぷわーん・・・どっかーん

古手は引かれて血だらけになってしまった

古手「ここは・・・どこだ？」

「ここは死と生存の境目じゃ」

古手「という事は・・・三途の川ということか」

「そうじゃ」

古手「あなたは・・・神様ということか」

神「頭がいいのうそうじゃ、私が神じゃ」

古手「さて何でこうなったのか教えてもらおうか神様」

神「実は・・・古手雅樹と古手正樹をまちがえてしもつて」

古手「あー・・・あるあるあ・・・ねーよwww

どうしてくれるんだよwwwマダやりたい事あったのにwww」

神「だからそちを転生させようとおもったのじゃ

転生先はインフィニット・ストラトス機体はそっちがきめてよい

ただし10機までじゃ」

古手「んーならカプセルファイターというおんげにある
機体からで・・・と・・・これもいいな・・・これか？これか？」

神「きまったようじゃのう体はどうするんじゃ？」

古手「んーなら体はできるだけ強化マックスで
ついでに機体んだけどオーバーカスタムEXにしておいて」

神「わかった・・・さて色々決まったようじゃが」

古手「そうだできたらISのコア作れるようにしたいな」

神「ふむよかるう」

古手「ではこれでいいかな足りなかったらこっちから呼んで
追加という事で」

神「ふむ・・・じゃあいつてこいあっちの時間は
ISが発表される前場所は日本じゃそれとあっちでイゲギユラー
が起きるかもしれないそれは注意じゃ」

古手「了解ーじゃーいつてくるわ」

神「あーこれこれそっちではない」

古手「ほえ、どこだ？」

転生先はI Sの世界(後書き)

さあ・・・やらかした

設定人物 設定機体

名前 古手雅樹

外見 バカテスの秀吉と同じ

性別 男

() は変形として使える機体

使用機体

ダブルオーライザー

(ダブルオーガンダム

ダブルオーガンダムセブンソード)

ストライクフリーダム

(ミーティア)

インフィニットジャスティス

(ミーティア)

ゴッドガンダム風雲再起

(ゴッドガンダム)

ガンダムHWS

(ガンダム)

ガンダムエクシア
(セブンスード・アヴァランチエ)

ウイングガンダムゼロ(EW)

ガンダムデスサイズヘル(EW)

ダブルオークアンタ

フリーダムガンダム
(ミーティア)

スキル説明

機体例 ガンダムデスサイズヘル(EW)

スキル1例 オートロックオンジャマーEXノ

敵のオートロックオンを無効化させる

スキル2例 ハイパージャマーECM

ユニットが待機動作時に潜伏+攻撃力増加+レーダーに敵軍表示

以下スキルなどは カプセルファイターオンラインウィキを見てく
ださい

A I
テ イ エ リ ア ・ ア ー デ

設定人物 設定機体（後書き）

ワンオフアビリティーかなり悩みましたww

白騎士事件（前書き）

本編ですよー

白騎士事件

古手「ここは・・・海岸か」

ティエ「ああそつだ」

声が来るほうは腕にある時計からだつた
そこからティエリアが出てきた

古手「うおｗｗｗｗびびつたｗｗ」

ティエ「そんなにびっくりすることはないじゃないか」

古手「ごめんごめん、ちなみに初期設定はおわってる?」

ティエ「ああ大丈夫だいつでも機体は使えるただし

ダブルオークアンタはオーライザーを20回使わないと無理らしい」

古手「わかつた」

ティエ「!? こつちに向かってくるミサイル20000以上!」

古手「なに!・・・白騎士事件か」

ティエ「そつだ」

古手「・・・ならばフリーダム展開して迎撃する!」

ティエ「了解、フリーダムガンダム展開」

古手「これはきついな・・・ミーティア装備できるか?」

ティエ「大丈夫みたいだ装備するか?」

古手「ああ、お願い」

ティエ「了解、ミーティア装備」

ミーティア装備のフリーダムになった古手がミサイルのところに行く

古手「ちょっときついな マルチロックオンいけるか?」

ティエ「大丈夫だロックオンは僕とヴェーダがやる」

古手「了解、古手雅樹 目標を迎撃する!」

千冬サイド

ドカン ドカン ドカン

千冬「これはきついな」

ドカン ドカン ドカン

東「ちーちゃんまだまだいくよー」

ドカン オカン ドカン

千冬「ああそうだ・・・いけない！」

カスッ

千冬「これはやばい」

oooooooooooo

千冬左から高熱源接近?!

ドッカーン

千冬「あれは……おい東あれは何だ？」

東「そうだね……未確認ISとっておくね」

ppppp

千冬「オープン回線……」

びっ

古手「こちら フリーダム 今から援護します」

千冬「ああ……わかった（フリーダム……）」

古手「ミサイル残り本数は？」

千冬「1500だ」

古手「任務了解 ティエリア！」

ティエ「了解ロックオン完了」

古手・ティエ「うおおおおおおおおおおお」

ハイマツトフルバーストにより500本はへった

千冬「こ……これは！」

ティエ「残り本数1000」

古手「ちっ、まだあるか！ハイマツトフルバーストチャージにどのくらい？」

ティエ「5分だ」

古手「それだと間に合わない！」

ティエ「だがどうする？」

古手「そうだ ウィングガンダムゼロを使う」

ティエ「そうか！ローリングバスターライフルで250 - 600は

減らせる」

古手「そうだ！機体変更！」

ティエ「機体変更！ウイングガンダムゼロ（EW）」

古手の周りが光る

千冬「な・・・なんだ！」

そしてそこには見たこともないISがあった

千冬「か・・・かわっただと！」

古手「前が出る！」

ティエ「接触まで2分」

ティエ「来た！」

古手「くらえ」

2つあったツインバスターライフルを右手に1本左手に1本もち
射撃しながら回る

千冬「束！アレは何だ？」

束「あれは攻撃しながら回ってるみたいだね」

古手「ティエエリア！フリーダムに！」

ティエ「了解」

そしてまたフリーダムに戻り本数を減らす

ティエ「残り2本！」

古手「そこ！」

ドカン ヒュン

古手「しまった!」

千冬「はああああ!」

ドカーン

千冬「はあ……はあ……」

古手「はあ……はあ……」

千冬「ありがとう……私は織斑千冬」

古手「……古手雅樹」

千冬「フリーダムと言ったな誰が作った」

古手「それはいえん」

千冬「わかったお前はどっする?このままだと捕まる」

古手「大丈夫だ海に潜って移動する」

千冬「わかった それじゃ」

2人は別々に別れそれぞれの所に移動する

古手 現在旅行中

ぷわーん

古手「おーここがパリかーすげーな
パリって言ったらピザだよな」

ティエ「そうだな」

あれから2年がたった

今俺達はパリに居る

なんでかって？それは旅行中である

古手「あーまじか千冬さん2連覇ならなかったか」

ティエ「そうみたいだな なんか千冬の弟を連れ去ってそれで
救出するのにそれで2連覇ならなかったらしい」

古手「そうか」

古手が立って移動しようとした瞬間

ドン

古手「おっと」

「????」「きゃっ」

古手「すまんな・・・」

「????」「いいえこちらこそすいません
大丈夫ですか？」

古手「大丈夫だ問題はない」

ティエ「それフラグ」

「????」「え?どこから?」

古手「あーそれはこれから」

古手の指輪からティエリアが出てきた

「????」「すごい見たことないよ!」

ティエ「僕の名前はティエリア ティエリア・アーデ ティエリア
で」

古手「俺は古手 古手雅樹 俺も雅樹でいいよ」

「????」「僕はシャルロット シャルロット・デュノアじゃあシャル
ロットで」

古手「あれ?デュノアって量産型ISで世界2位のところの」

シャル「はい、そうです僕はそこでテストパイロットをやっています」

古手「まさかの嫁きたああああああああ」

古手「にやるほど」ということは専用機持ちってことか」

シャル「そうですね」

古手「ほー・・・ああすまんせっかくアイス食べてたところに」

シャル「あ、大丈夫ですよ」

古手「いやだめだろせっかく食べてたアイスなんだからなあ？ティエリア？」

ティエ「そうだな」

シャル「うん、ありがとー」

古手「何味が良い？」

シャル「じゃあ・・・バニラ」

古手「まじか、じゃあ俺もバニラ スイマセーンバニラ2つ」

店員「あいよー これからデートかい？」

シャル「いや／＼／＼これは／＼」

古手「いやｗｗこれはデートじゃｗｗ」

店員「サービスだほれダブル」

古手「サンクスｗｗほれシャルロット」

シャル「ありがとー」

まいどー

古手「さて・・・今夜の宿探すかー」

シャル「え？宿決まってるの？」

古手「まあ旅してたしよ」

ティエ「お金は結構ある」

シャル「なら僕の家きてよ」

古手「おまじかならお邪魔しようかな」

シャル「うんきてよー」

古手「おじゃましてーす」

シャル「おいでおいでー」

古手「広いなー」

シャル「まあね ケーキとかあるよ?」

古手「まじかキタコレ」

シャル「にこっ」

古手「うっはーうめー」

そういえばシャルロットのES見てみたいな」

シャル「ESを？別にいいけど明日ね？」

古手「まじでやったーじゃあ・・・そろそろ時間だからねー」

シャル「うん、おやすみー」

古手「んーおはよーティエリア」

ティエ「おはおう 古手」

ガチャ

シャル「雅樹ーおはよー」

古手「おーおはよー」

ティエ「おはようシャルロット」

シャル家庭

シャル「じゃあこちらへんでいいかな」

古手「ワクワクテカテカ」

シャル「そんなに期待しないでーww」

古手「おーごめんごめん」

古手「むー」

シャル「どうだった？」

古手「うん、良い機体だねでももうちょいOSで早くできるとね」

シャル「え？本当?!」

古手「これつかってみて」

シャル「うん、わかった」

古手「じゃあ今日はありがとね」

シャル「うんこっちもOSありがとー」

ガチャ

古手「んー満足さて・・・日本に行きますか」

ティエ「日本か・・・織斑一夏のところに行くのか？」

古手「まあ・・・隠居だ」

ティエ「まあいいじゃないか？」

古手「後3年したら織斑一夏がISを起動して物語の始まりが起きる」

ティエ「それまで何をしている？」

古手「まあ・・・のんびりするとしま『ドッカーン』?!」

ティエ「なんだ!」

古手「ティエあそこ!」

ティエ「あれは・・・シャルロット!」

古手「助けるぞ!ティエ!フリーダム!」

ティエ「了解ZGMF X10Aフリーダム」

古手「古手雅樹 フリーダム 行きます!」

ドン!

地面を蹴りシャルロットのところに急ぐ

シャルロットサイド

シャル「行っちゃった結構かっこよかったなあ雅樹きやつ／／／／／ほれちゃったかも」

そこに黒い影がきた

ゴオオオ

シャル「!?!」

「シャルロット・デュノアだな貴様を貰い受ける」

シャル「嫌だと言ったら?」

「これでぶっ飛ばす」

ガゴン ひゅーーーどっかーん

シャル「くっ!」

ぎりぎりのところで回避をする

「オラオラオラオラ」

だだだだだだだ

弾幕を回避しながら反撃をするしかし1本のミサイルがシャルに向かう

シャル「！だめ！回避できない！」

「チェックメイトだ」

シャルが目をつぶった瞬間

ビュン ドッカーン

「なんだ！」

ガギン どっかーん

相手のISの持つてる武装を切り刻み

「しまった武装が！」

離れたところの場所に何かが近づく

シャル「？」

なにがなんだかわからない

そつと目を開けるとそこには

4枚の羽 色は白黒青のトリコロール

極めつけはフルスキン

「こ……こいつは！」

シャル「フリー……ダム」

そこには白騎士事件にいたISフリーダムガンダムであった

そしてフリーダムは黒い影に向かいハイマッドフルバーストを放った

「く……くるなあああ」

ドッカーン

シャル「！ビーム兵器！」

フリーダムはシャルのところに向けて頭をなでる

警備員「だれだ！」

警備員2「あれは指名手配中のフリーダムだ！」

フリーダムは警備員に気づきどこかに飛んでいく

ひゅーん どおおおん

警備員「大丈夫でしょうか？」

シャル「追うのやめてアレは僕を守ったんです」

警備員「で・・・ですが」

シャル「命令です」

警備員「わかりました」

シャルはいなくなるまでフリーダムを見つめた

古手日本帰国中の出来事

現在ドイツ国境

古手は

古手「うっはーこころ辺ひどいな」

ティエ「まるで刹那が居た場所みたいだ」

古手「ああそつだな・・・あれは」

ティエ「シュヴァルツェラ・レーゲン！」

古手「しかも4対1かよ卑怯じゃないか」

ティエ「まるで戦争みたいだ・・・」

古手「ティエ・・・武力介入する」

ティエ「いいのか？」

古手「ほおつては置けん」

ティエ「わかつた機体は？」

千冬「もう少しでそっちにつく
持ちこたえる」

ラウラ「了解」

ラウラ「はああああっ」

ドーン

「これでもくらええええええ」

ラウラ「くっ」

ヒュン

ラウラ「しまったー！やられるー！」

ドカーン

ラウラは目をつぶった
しかしやられる事はなかった

ビュン

「何っ！」

ラウラはゆっくりと目を開いた
そこにはシールドを前にやったフリーダムが居た

ラウラ「アレは・・・フリーダム・・・」

「フ・・・フリーダムだと！」

古手「こちらフリーダム 援護します今のうちに退避を」

ラウラ「りよ・・・了解！（声が若いな）」

フリーダムは2本のビームサーベルをつなげ「アンビデクストラス・ハルバード」
と呼ばれる両端からビーム刃を出力する形態で展開した

ラウラ「びっ……ビームサーベル！」

「う……うてうて撃ちまくれ！」

フリーダムはビームサーベルで相手の武装を破壊する

ガギンガギン

ラウラ「速い！」

古手「1機目」

ティエ「古手右だ！」

古手「あそこか」

古手は腰からビームライフルをとりもう1機の武装を破壊する「

どっかーん

「ひいひい」

古手「・・・ふう・・・撤退したか」

ラウラ「きよ・・・協力感謝する」

古手「ああ問題はないそれじゃ」

ラウラ「まってくれ何でお前は強いのか？」

古手「・・・守りたいものがあるただそれだけのために俺は強くなる」

ラウラ「・・・守りたいもの？」

古手「ああ・・・お前も何かあったとき守ってやる約束だ」

ドンドン ひゅーん

千冬「ラウラ！」

ラウラ「教官！」

千冬「大丈夫か？」

ラウラ「大丈夫です」

千冬「あれは・・・なるほどな」

ラウラ「教官？」

千冬「いやなんでもない戻るぞ」

ラウラ「了解」

古手「さて訳解ごと起きないように戻りますか」

ティエ「そうだな」

古手「ティエエクスピア迷彩モードで展開」

ティエ「了解」

ビューン(ブーストの音)

そして古手は日本へと戻った

IS学園入学（前書き）

ホームページ

IS学園入学

古手「ん・・・ここは・・・」

神「よう」

古手「あれ神様やん」

神「そろそろプレゼントをあげようとな」

古手「5年も待ちくたびれた」

神「ほれ」

古手「こいつは・・・V2アサルトバスターとヘビーアームズ改（

EW）じゃんw

サックスww超うれしいわww」

神「ふおふおふおそしてそちに頼みたい事がある」

古手「なにになに?」

神「もしかしたらそつちでイレギュラーな事が起きるかもしれん・・・
そこは・・・」

古手「了解 ならば神様よ 体強化してくれないかな」

神「いいじゃろっ」

IS学園屋上

ちゅんちゅん

少年は屋上にぐったり寝そべっていた

「一夏、そこで何をしている」

一夏「何だ箒か、どうしたんだそこで」

箒「お前を探していた」

箒は恥ずかしながら言った

一夏「なんで？」

箒「まあいろいろあるんだ」

一夏「あ、そうだ箒」

箒「なんだ？」

箒は恥ずかしそうに聞く

一夏「剣道の世界大会優勝おめでとう」

篤「なんでお前が知っている」

一夏「なんで？つて新聞で見たし」

篤「なんで新聞なんか見てるんだ？」

一夏「あ、後 久しぶり、6年ぶりだけど篤だっですぐにわかつぞ」

篤「えっ・・・」

一夏「ほら髪型一緒だし」

篤「よくおぼえている（おい篤、あれを見る）えっ？
何があったのか篤はびっくりしていた

ひゅーーーーーーどいとおおおおおおん

一夏「第1アリーナに何か落ちたようだ行ってみよう篤」

篤「えっちよ、待って一夏」

第1アリーナ カタパルトデッキ

一夏「はあはあここら辺だよな・・・」

箒「一夏待つてくれたって良いじゃないか・・・はあはあ」

一夏「あ、いたあそこだ箒」

箒「むっ」

2人は倒れている者に近づく。

一夏「おい大丈夫か？おい、・・・箒、千冬姉を呼んできて」

千冬「もうここにいる」

一夏・箒「織斑先生（千冬姉）！」

千冬「はあ・・・織斑先生と・・・今回は許す　で、様態はどうだ？」

一夏「気を失ってる、千冬姉・・・」

千冬「（ん・・・こいつは・・・）よし、医務室に連れて行くこれは
他言無用だわかったな？」

一夏・箒「わかった（了解した）」

古手「ん・・・ここは・・・」

千冬「目覚めたか・・・」

古手「あなたは・・・」

千冬「私は織斑千冬、このIS学園の先生だ」

古手「俺は古手雅樹 18だ」

千冬「お前があのかのときのISにのってたやつか」

古手「覚えていたんですね」

千冬「まあ覚えてるはずだろう」

古手「そうですね」

千冬「お前は行くあてがあるのか？」

古手「ないですよ」

千冬「ならこの学園に入るがいい学費などはこちらが援助する」

古手「その裏は？」

千冬「データ収集」

古手「俺が乗った機体時のみ動画とるだけでしたら良いですよ」

千冬「わかった」

古手「交渉成立」

千冬「じゃあこれに着替える」

古手「これはこの学園の制服でよろしいのですかね」

千冬「ああそうだ、この学園は全寮制で部屋は・・とりあえず、すまんがベットはあるが物置になっっている部屋でも良いか？」

古手「それでうれしいです」

千冬「じゃあ着替えたら呼んでくれ」

古手「わかった」

1 - 2分後

古手「ちょっとでかいがまあいいか、おわりました」

千冬「おわったか、部屋はこっちだ」

教師少年移動中

古手「物置って言ってますけど部屋広いですね」

千冬「そうだな、書類、教科書はそこに入っている」

古手「ありがとうございます」

千冬「今日は寝ろ、明日から授業だそして明日からは織斑先生だ」

古手「分りました織斑先生」

明日から少年の学園物語が始まる・・・

1年1組

古手「むっはー ねむい おはようティエ」

ティエ「おはよう古手」

古手「顔洗って着替えないとな」

ティエ「今日はテストがあるらしいからな」

古手「そうだな」

千冬「おはよう古手君」

古手「おはようございます」

千冬「さて今日はテストなんだが先にご飯を食べようか」

古手「はい」

千冬「さてここが食堂なんだが今は誰も居ないが普段はここに居る」

古手「了解」

千冬「さてなにを頼む？」

古手「ならカレーで」

千冬「それだけで大丈夫か？」

古手「大丈夫だ問題はない」

ティエ「だから、それはフラグ」

千冬「おーティエリアか久しぶり」

ティエ「お久しぶりです織斑千冬」

千冬「あそうだな今までお前達どこに？」

古手「まずあの後箱根に行って隠居して2年後ぐらいにイタリアに行つて

次にドイツそれで日本で3年隠居ですね」

千冬「そうか・・・ちなみにドイツには私も居た」

古手「知ってます 弟さんを助けて情報をくれたドイツをお礼にで

千冬「そうだ さて食べ終わったみたいだし アリーナに行くぞ」

古手「了解」

第2アリーナ

千冬「今回はテストだが本気でいけ」

古手「了解」

ティエリア「今回機体は？」

古手「本気で行けっといわれてるけど・・・デスヘルEWで」

ティエ「了解 デスサイズヘルEW展開」

千冬「今回あいての山田真耶先生だ」

山田「山田真耶ですよろしくね」

千冬「おまえのISは・・・死神みたいだな」

古手「気にしたら負けという事で」

千冬「わかった でわ・・・始め！」

古手「はああああっ」

ビームシザーズで攻撃しようとするが

ガガガガガガガガガガ

古手「いけね」

マシンガンの嵐が降ってくる」

山田「シールドエネルギーがない?!」

古手「残念でした先生俺のISはシールドエネルギーがないんでね
」

千冬「だからフルスキンなのか・・納得」

古手「めんどいから終わらせるよ」

古手はハイパージャマーECMを発動した

山田千冬「き・・・きえた!」

そしてビーツ

勝者古手雅樹

千冬「古手、お前何をした?」

古手「この機体のスキル2を発動しただけですよ」

千冬「スキル？」

古手「・・・ハイパージャマーECM・・・」

山田「ハイパージャマーECM？」

古手「ユニットが待機動作時に潜伏＋攻撃力増加＋レーダーに敵軍表示
これがスキルの中身です・・・後でスキルだけでしたらデータで送ります」

千冬「わかった 今日休め明日から学校だ」

古手「わかりました」

一夏サイド

「ねえねえ今日第2アリーナで死神が見えたらしいよ」

一夏「死神？」

「なんか羽がコウモリみたいでカマもってた」

一夏「すごいなそれ」

「あとさー 食堂ですごくかわいい子見つけたって誰かが行ってた」

「夏」「女の子か」

「そうだね」

「夏」「食堂にいるかもね」

古手「はぁ・・・疲れた速く食って寝るか」

千冬「食べ終わったか？」

古手「はい」

千冬「ならこれを明日までに」

古手「もう覚えましたよ」

千冬「なんだと」

古手「じゃあ僕はこれで寝ますね」

千冬「明日ここに呼びに来るからな」

古手「了解」

ティエ「アストレアをか？できるが」

古手「じゃあよろしく」

古手「ふぁー・・・おはようティエ」

ティエ「おはよう 古手」

古手「とりあえず紅茶入れたら顔洗いに行くか」

古手「ティエ！時間目なんだ？」

ティエ1・2時間目はISについて3・4時間目は実践練習

古手「そうか」

ドン

千冬「起きてるか？」

古手「はい起きてます」

千冬「いやすまん、会議が送れてな」

古手「大丈夫です」

千冬「でわ、入って言われたら入るんだぞ」

古手「了解」

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦では、入学時点での各クラスの実力測るものだ。今の時点でたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間は変更が無いからそのつもりで」

「はい！ 織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

一夏「オ・・俺?!」

千冬「でわ、候補者は織斑一夏だけかほかにいないのか？」

バンツ！

古手「これはセシリアか」

セシリア「納得がいきませんわ！」

古手「原作どおりはいりませーす」

セシリア「そのような選出は認められません！

大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

古手「……………ティエ」

ティエ「何だ？」

古手「武力介入するわ」

ティエ「正気か？」

古手「大丈夫だ機体は使わん」

ティエ「わかった」

セシリア「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。

それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！

わたくしはこのような島国までISの修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

セシリア「いいですか！？ クラス代表とは実力トップがなるべき、

そしてそれはわたくしですわ！」

セシリア「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけな

いこと自体、
わたくしにとっては耐えがたい苦痛で
」

一夏が言おうとした瞬間 ドアが開いた

ガラッ

古手「ならイギリスの底力を教えてもらおうか」

「「「「「誰・誰？」「「「「「

ざわ・・・ざわ・・・

古手「言うておくがイギリスだって国自体自慢ないだろ世界一不味
い料理

世界選手権第1位じゃないか」

一夏「後進的って・・・イギリスだってそうじゃないか」

セシリア「なっ……!」

古手（ティエセシリアが顔面トランザムしてる）

ティエ（……そうだな）

セシリア「あっ、あっ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

古手「はあっ…先に俺らの祖国を侮辱したのあんただろ」

セシリア「っ 決闘ですわ！」

古手「いいだろう先に言っておくがお前じゃおれに勝てない」

セシリア「な！言いましたわね！なら負けたら私の奴隷になってあげますの」

古手「へーww良いだろう俺は接近武器で決めてやるよ

そして俺が勝ったら……どうしよっかな俺のメイドということだ」

セシリア「わ……わかりました」

「それ本気で言ってるの？」

「男が強かったのって大昔の前だよ？」

「セシリアさんはIS使えるかもしれないけど
あなたはIS使えるの？」

一夏「お前まさか昨日第2アリーナにいた死神？」

古手「死神？ああデスヘルかそういえば別名死神だけど
まあそれは俺だな」

「「「「「「「「「「「「
ええええええええ
「「「「「「「「「「

古手「そういえば自己紹介してなかったな
俺の名前は古手雅樹 趣味は特にないが
以後よろしく」

古手「後言っておくが俺もIS使える時点でその考えはやめておい
たほうがいい
人生この後後悔する いいな？」

千冬「決まったようだなそれでは来週の月曜日にクラス代表戦を行う
セシリア・古手・織斑の3名は準備をするように後古手」

古手「？」

千冬「お前の席は右前から3番目の席だ」

古手「了解」

本音「のほとけ布仏 ほんね本音よろしくー

古手はのほほんさんに小さな声で言う

古手「会長と繋がりであるでしょメイド的な意味で」

はのほほんさんだけに聞こえる音量で話す。

コレは原作でのほほんさんが会長とつながりがあるのを知っていたからそうした。

すると、のほほんさんは一瞬だけ少し目を開いてまたつぶった？

本音「どうしてしってるのー？」

古手「ひみつーwwwちなみにこれ言ったらのほほんさん嫌いになっちゃうから」

本音「むーマッキーのいじわるー」

古手「WWWならこれなら言っても良いよ調べても俺の機体の情報は出てこないってね」

本音「なんでー？」

古手「だって俺が作ったやつだからWWW」

本音「なるほろー」

古手「じゃあそついで」

さてこうして1週間何をしていたかと言つと

・セシリアの情報集め

・普通に授業

・キントレ

の3つである

「ううん、一週間はあっという間に過ぎたよ、この頃だ。」

クラス代表戦

さて古手は現在第3アリーナカタパルトデッキである

先に織斑一夏対セシリア・オルコットの
試合をやっていたが原作どおり一夏が負けてしまい
俺の出番となった。

一夏「すまん、俺の仇をとってくれ」

古手「任せるマダあいつ調子乗ってるからな」

千冬「古手早くしろあいつはもう行ってるぞ」

古手「了解、ほんじゃまあ3分で片付けてくるわ」

千冬「正気か？貴様」

古手「全力で行きますからティエリア！」

ティエ「デスサイズヘル（EW）展開」

古手「ふう・・・さて行きますか」

箒「なっ！フルスキンだど！」

一夏「かつこいー」

ティエ「カタパルトを譲渡 進路クリアー デスサイズヘル発進」

古手「古手雅樹 デスサイズヘル 行きます！」

3・・・2・・・1・・・ゴー

「みて！古手君が出てきた」

「本当に死神だあー」

千冬「両者準備は良いか？」

古手「いつでもいいぜ」

セシリア「問題はなくなつてよ」

千冬「では・・・始め！」

古手「本気で行かせてもらおう！」

セシリア「それはこっちのセリフですのことよー!」

ビュン ビュン

セシリアがライフルを撃ってくるしかし古手はスイスイとよける

古手「ホレホレどうした」

セシリア「くっなぜ当たりませんか?!」

それはそうだが古手は始まる前からオートロックオンジャマーを発動している

セシリア「これならどうですの!」

後ろから誘導兵器を使用するが

古手「遅いな・・・」

スイツスイツ

古手「もう終わりか?ならこっちから行くぜ!」

セシリア「くっ インターセプター!」

ガギン

古手「ほう・・・やるな・・・ならこれならどうだ？
スキル2発動！ハイパージャマーECM発動！」

セシリア「スキル2？ハイパージャマー？」

古手「こつ言うことだ！」

ドカツ

セシリアに蹴りを入れると古手は1回セシリアと離れる

セシリア「なっ・・・何をしますの？乙女のおな・・・か・・・」

「ねえ！古手君どこ？」

「消えた？」

「一夏「どこだ？」

「第「わからん！」

ハイパージャマ・・・そう待機状態は永遠に消えてる状態

セシリア「どこですの！姿を現しなさい！」

古手「できると言えばできるがこいつはそういうスキルなんでね」

セシリア「スキルとはなんですか?!」

セシリアは怒ったように言う「

古手「スキルと言うものは・・・ワンオフアビリティのことといえ
ば早いかな

俺には複数のワンオフアビリティがある」

千冬「なるほどこれは・・・」

一夏「さっぱりわからん」

古手「さてお話はおしまいだ　これで俺の勝ちだ」

セシリア「な・・・なにを言いますの？まだ500も私は残って・・・
えっ」

ガギン

『し・・・シールドエネルギー・・・勝者・・・古手雅樹』

セシリアの20メートル離れた後に古手が出てきた

古手「俺は言った・・・お前じゃ俺に勝てない・・・
それがその実力だ・・・」

古手「俺もお前はマダ弱いこれからもつと強くなれ強くなったらいい物くれてやる」

こうして古手はカタパルトデッキに移動した

一夏「すごいな！本当に勝った！」

千冬「時間は・・・2分50秒かぎりぎりだな」

古手「まあそういうことだ、じゃあ先生俺はお先にねますね」

千冬「ああ、お疲れ」

こうしてフラグを立てた覚えが無い
セシリアに優しくされた事はこれからの事であった

模擬戦

とある日の放課後

古手「織斑先生」

千冬「なんだ？」

古手「アリーナを借りたいんですけど」

千冬「ああ、わかったそのかわり」

古手「データは取るんでしょわかってます動画だけですよ」

千冬「じゃあ、私も行く」

古手「まじですかWWW」

千冬「私が行ったら不味いのか？」

古手「いやーWWWそういうわけじゃWWW」

千冬「なら何がいけないのだ？」

古手「いやー、そろそろ別の機体も使い慣れておかないとねww」

千冬「なに、マダあるのか？」

古手「まあ織斑先生だけだらいいか」

千冬「わかったならすぐにいこっ」

古手「仕事はどうするんですか？ww」

千冬「山田先生に任せる」

古手「おいおいww」

現在位置アリーナに向かう廊下

一夏「あれ古手と千冬姉だ」

古手「あれどうした一夏・箒」

一夏「いやーアリーナ借りようとしたら先約がいて」

古手「ああ、それ俺ww」

箒「そうなのかー！」

古手「ちょっと機体なれしよつと思つてお
・・・一緒に来るか？」

一夏「おーいくいく行くよな？」
「」

箒「あ・・・ああ」

アリーナカタパルトデッキ

古手「さてどの機体から行くつかな」

一夏「そういえば古手の機体って何個あるんだな？」

古手「・・・12ぐらいかな」

一夏・箒「12!」

2人は驚いてるが千冬先生は・

千冬「多すぎだろ・・・」

冷静であつた

古手「さて・・・敵のAIはマックスで」

千冬「それは許可できない」

古手「えー・・・なら10でいいですよ」

千冬「わかつた」

古手「先生のタイムってどのくらい？」

千冬「私のタイムは約7秒だ」

古手「了解 ティエリアよろしく」

一夏「なあ古手、そのティエリアって誰だ？」

古手「ああ、マダ2人には紹介してなかったな ほれ」

古手は前に際しだす

ティエリア「はじめまして僕はティエリア・アーデ、よろしく」

一夏「おお！、一夏、織斑一夏だ」

箒「箒 篠ノ之箒、よろしく」

古手「じゃあ挨拶は済んだところでティエリア、ガンダムで」

一夏「ガンダム？」

古手「見ればわかる」

古手の周りが変化して装備されていく

古手「これがガンダムだ」

一夏「かっこいいー白式みたいだな」

千冬「背中の子は何だ？」

古手「見ればわかるよティエリアファンネルはよろしく」

ティエ「了解」

今度は違う機体で」

千冬「わかった」

古手「ティエリア インフィニットジャスティスで」

ティエ「了解」

また古手の周りが変化して赤い真紅の機体が出てくる

千冬「今度は格闘方か」

一夏「背中のはつは何だ？」

古手「リフターだよ」

古手「古手雅樹 ジャスティス出る！」

千冬『じゃあ、2回目いいか？』

古手「もち」

千冬「ターケティング 始め！」

ティエ「了解 アストレア展開」

千冬「今度は何の機体だ？」

古手「ガンダムアストレア まあ試作機体ですよ
オーバーカスタムはやってませんが」

一夏「オーバーカスタム？」

古手「ああ、俺の機体はステータスをいじくる事で切るんだ
たとえばこいつを見てくれ」

古手はアストレアのステータスを見せる

古手「たとえばある一定の経験地を
攻撃とかスピード・防御とかにあげる事できるんです」

攻撃力上げたり下げたり防御を上げたり下げたり

古手「実際にやってみればわかるよじゃあ先に行ってるよ」

そうして古手はカタパルトに足を乗せる

古手「ふう……古手雅樹　ガンダムアストレア　目標を駆逐する
！」

一夏「これ前から聞いてると結構かつこいいんだよね真似してみよ」

一夏はカタパルトに足を乗せ大きく息を吸う

一夏「織斑一夏！白式！行くぜ！」

2人はアリーナ中央に向かう

古手「……おもったんだがいつの間にか人がいっぱい居るんだ？」

古手が話しているときにアリーナにいっぱい集まってきた

一夏「さあ誰かが噂してたんじゃないか？」

「きゃー古手君と織斑君よ！」

「やっぱり古手君のISかつこいい！」

「今度の機体はなんていう機体かな？」

そしてとうとうカタパルトデッキに山田先生が着てしまった

山田「すごい数ですね」

千冬「山田先生なぜ君も居るんだね？」

山田「私も見たかったんです」

千冬「そうか」

あきらめたようだ

古手「さて始めるよ 一夏良いかい？」

一夏「ああもちろんさ」

千冬『はじめ！』

古手「先手もらい！」

ビュン

古手はGNビームライフルで乱射する

ビュンビュンビュン

一夏「これならよければ！」

古手「ほう ならこれでどうかな」

再びGNビームライフルを乱射する

一夏「だからだいじょ・・・いっ！」

ビューン

一夏「あつぶねー」

しかし一夏のシールドエネルギーは減ってる

一夏 750

古手

千冬「ノーマルで250も減ったか」

古手「じゃあカスタム上げるよ」

古手はアストレアを攻撃極振りにし強化スキルを必殺覚醒をつけた

古手「さて全スキル発動！」

一夏「？」

古手「ああ、スマンナ俺の機体全てにスキルがあるんだちなみに発動したスキルは
リロードアップ 底力 必殺覚醒だ」

千冬「攻撃振りの底力だから・・・ちよつとやばくないかこれは」

ドーン

古手「おーい大丈夫か？」

一夏「だ・・・大丈夫」

千冬「古手、ちよつといいか？」

古手「わかりました、箒、一夏を頼む」

箒「わかった」

学園地下 レベル4

古手「・・・なんですか？」こは

結構薄暗いところである

千冬「まず、聞きたい事がある」

古手「俺の機体の事ですね」

千冬「ああそうだ」

古手「俺のISはそもそもISではない」

千冬「なんだと別のコア・・・別の力で動いてるってことか？」

古手「そうです、私の機体は機体にもよりますが
例えば1つ目が小型の核」

千冬「なんだと！核をISに転用するなんて・・・こちらにそんな技
術こちらにはない」

古手「そうですね、それでもう1つはバッテリー」

千冬「バッテリーか」

古手「そうですねそして次はここにもあるコアですね」

千冬「……お前はISのコア作れるのか？」

古手「機密事項です」

千冬「わかった」

古手「そして最後に……GNドライブ」

千冬「GNドライブだとなんだそれは」

古手「さっき使ったアストレアの背中にあるコーンのやつです」

千冬「あれか緑色の粒子が出てきたやつか」

古手「そうですね俺はそれをGN粒子って言ってますね」

千冬「GN粒子か……」

古手「先生ちなみに言いますけど公開しないのなら先生のためなら

1機は作っても良いですよ

モビルスーツインフィニットストラトス
MSIS今考えた名称ですけど」

千冬「MSIS……か」

古手「ええ。機体はアストレイレッドフレーム」

千冬「レッドフレーム？」

古手「データは渡しておきますね」

そういつて古手はレッドフレームの情報を渡す

千冬「・・・わかったお願いするでしょう」

古手「了解」

そういつて古手は寮に戻った

祝いパーティー

現在とある日の月曜日

午後7時

古手「さーて寮に戻るとするか」

本音「まっきー」

古手「あれ、のほほんさんどうしたん？」

本音「おりむーのクラス長就任パーティーやるからよかつたきてー」

古手「あー・・・了解」

古手「さて1回部屋戻るか」

ガチャ

古手はシャワーを浴びたら行くこととするが

一夏「はぁ・・・」

黛「あれ？男子は2人居るって聞いたけどもう1人は？」

一夏「そういえばマダ来てないなあいつ」

黛「そうなのーわかったじゃあ織斑君だけ」

パシヤリ

一夏「いきなりとらないでくださいよ」

黛「ごめんごめん後一言」

一夏「・・・がんばります」

黛「文句があるなら掛かって来いっつと」

一夏「いや・・・ねっ造しないでください」

黛「あとセシリアちゃんも一言」

セシ「えとですわたくしは」

黛「長くなりそうだから以下省略」

セシリア「なっ！」

黛「さて後は集合写真っつと」

鼻血またはがっくりしてる人がいた

現在古手の姿は 猫耳+メイド服+尻尾+ニーソの姿
そして外見はどう見ても女の子にしか見えない
まあ姿はバカ スの秀吉だからしょうがないか

古手「な・・・なんだ？」

一夏「おまえ・・・何その格好は・・・」

古手「ああ、シャワー浴びて着替えて行こうとしたら
着替えがなくなってて代わりにこれがあったから着替えた」

そして古手は必殺技を出した

古手「もえもえーきゅん」

一夏「どきっ！」

古手「おー 一夏顔真っ赤ーWWW」

古手は一夏の顔を覗いた

一夏「おわっWWWこっちみるなWWW」

古手「さてこれ以上やばいかもしれんから逃げるか」

「夏」・・・そうだな」

プー—————

この血の海を織斑先生が見たのは古手たちが部屋に戻って数分後だった

AM7時

古手「さーて今日もがんばるかー」

「夏」おはよー古手」

古手「おーす」

一夏「何食べるー?」

古手「んー野菜が食べたいから野菜系でいいか」

一夏「まじか なら俺は目玉焼き定職で」

古手「よくあさからそんなの食えるな」

一夏「お前はそんなに食べないな」

古手「ISにのって胃から出る可能性があるから」

一夏「なるほどね」

本音「おりむーとマッキー一緒に食べて良いー?」

古手「俺は別に構いやしないが 一夏?」

一夏「俺も別にいいよ」

本音「やった、そういえば今日転校生来るらしいよー」

古手「そうかもうそんな時期か」

一夏「え?」

古手「いやなんでもないそういえばそろそろだよなクラス別対抗戦」

一夏「そうだったけ?」

本音「おりむーおぼえてないのー？」

一夏「ああ」

古手「さすが一夏だな」

本音「そうだねー」

こうして教室へを向かうのであるがそこから波乱が起きるのは
古手意外誰も知らない

登場！セカンド幼馴染

教室前廊下

古手「なあ転校生って誰？」

本音「2組らしいよ。」

古手「やっぱり2組か」

本音「やっぱりみたいな口だけど知ってたの？」

古手「まあね」

本音「まっきー何でもしってるね」

古手「それなりの情報があるからね」

本音「ふーん」

古手「さて席に戻るか」

本音「あーい」

つとそのときドアが急に開く

「一夏！宣戦布告しに来たわよ！」

古手「（おっときたか）」

一夏「鈴！鈴じゃないか！似合わないぞ（笑）」

鈴音「な・・・い・・・一夏！なんて「ゴツ」ぎゃ」

千冬「チャイムは鳴ったぞそこでけ邪魔だ」

鈴音「ち・・・。千冬さん」

千冬「織斑先生ださっさと戻る」

鈴音「一夏後でね！」

そうして鈴音は自分の教室に戻る

千冬「さてもう少いでクラス対抗戦なんだが・・・古手！」

古手「ほえ・・・あい！」

古手はいきなり呼ばれてびっくりする

千冬「一夏を鍛えてやれ第3アリーナを放課後たまに貸してやる」

古手「了解」

千冬「それでは授業を始める」

そして授業中3回出席名簿で叩かれたのは秘密である

バシンバシンバシン

「」「ぎゃあああああああ」「」

3時間目前

千冬「次の授業は外だぞ早めにな」

全員「はい」

古手「さて、一夏行くぞ」

一夏「おう」

男2人はアリーナで着替えるように決められている
ちなみにここから近いのは第2アリーナ

ちなみに学園の正面入り口を後ろにして

右に寮

正面に校舎その後ろにグラウンド

左にアリーナである

(作者の妄想)

古手「速く着替えないと織斑先生の出席簿アタック
がくるからな速くしないと」

一夏「ああそうだな」

千冬「さて、今日は飛行演習などを行う、織斑・古手・オルコット
飛んで見せる」

セシ「一・古」「ハイ」「」

古手「ティエ起きてるか？」

ティエ「ああ、機体はどうする？」

古手「今回はアストレアでいいか」

ティエ「了解ガンダムアストレア展開」

古手の周りが光ってアストレアになっていく
右手にプロトGNソードとGNビームライフル
左手にGNシールドを展開する

千冬「いけ」

古手「古手雅樹 ガンダムアストレア行きます」

ドン

古手は足をまげて地面をけるようにして空を飛ぶ

一夏は一步で遅れた

千冬「何をしているアストレアはともかく
性能はブルーティアーズより上だぞ」

一夏「といわれても・・・前方に三角をイメージして・・・」
セシ「イメージは所詮イメージですわ」

古手「そつだ自分がおもつように飛べばいいとおもつよ」

一夏「自由にねえ・・・うーん」

古手「まあ練習を積み重ねればいいさ」

一夏「そうか、わかった」

千冬『よし、次急降下の着地10センチセシリア・古手・織斑の順にやれ』

セシリア「じゃあ私からお先に」

ヒューン……シユゴオオオオ

古手「さて俺の出番か ほっ」

シューンシユゴゴゴゴゴ

古手「さて一夏の番だが……」ドゴーン「やっぱりだめだったか」

安定の信頼の犬神家

千冬「誰が穴を開けるといった後始末は自分でやれよ」

一夏「はい……」

首が抜けないらしい

古手「一夏……手伝つよ」

一夏「ありがと……」

古手「あーおわったー」

一夏「さて……いくか」

古手「ああそうだな早く行かないとメシなくなるからな」(アリー
ナ更衣室入り)

一夏「何食べるんだ？」(上脱いでる)

古手「んー久しぶりに中華系食べようかな」(上を着る)

一夏「おおそうだな」(上着る)

古手「一夏はなに食べる？」(下をはく)

一夏「俺も中華にしようかな」(下を脱ぐ)

古手「中華そばもいいけどね」(着替え完了)

一夏「それはらーめんだろ」(下をはく)

古手「まあな」(待機中)

一夏「まああつちで考えるか」（着替え完了）

鈴音「一夏やつと来たわね！」

一夏「鈴！・・・メンのびてるぞ」

鈴音「あんたがくるのおそいのよ

古手「一夏・・・誰？（知ってるけどな）」

一夏「ああ、凰 鈴音な、鈴こいつが俺と同じ男で
IS起動できるやつのが古手雅樹」

古手「古手雅樹だ 古手でもいいし雅樹でもいい」

鈴音「へえー、よろしく凰 鈴音よこっちも鈴でいいわよ」

古手「了解、一夏終わったらアリーナな」

一夏「わかった」

鈴音「何するのよ？」

一夏「ISの練習」

鈴音「なら私が一夏に教えるわよ」

一夏「大丈夫、そこは古手から教えてもらっ」

古手「というわけだ、すまん」

鈴音「わかった」

篝・セシリア「ちょっといいか（ですわ）」

以下原作どおり

アリーナカタパルトデッキ

古手「さーてやるか」

一夏「今日はどうするっ」

古手「んーそうだな対近距離・射撃の練習でもするか」

一夏「わかった、今日はどの期待で？」

古手「んー”エクシアのセブンスード”かな」

一夏「あれ、アストレアじゃ？」

古手「”エクシア”は”アストレア”の進化型だからな」

一夏「へえー・・・」

古手「じゃあ一夏IS装備して、ティエよろしく」

一夏・ティエ「わかった」

2人の体は光ISを装備する

古手「さて、行きますか」

一夏「おう」

古手は足をカタパルトに乗せる

古手「古手雅樹 エクシア行きます!」

ランプが1個づつ消えて緑のランプが3つ光るそしてカタパルトが発射する

パシユ

一夏「俺も真似してみるか」

一夏「織斑一夏 白式行くぜ!」

ランプが1個づつ消えて緑のランプが3つ光るそしてカタパルトが発射する

パシユ

2人はアリーナの中央に向かった

古手「一夏いくよ」

一夏「おう」

ガギン

がギンガギン

ガギンガギン

バシユバシユバシユ

ガギンガギン

バシユガギンバシユガギン

古手「ふう……一夏休憩するか」

一夏「そつだな……またギャラリーが」

「キヤー織斑君よー」

「古手くーんこつちむいてー」

「キヤーッ」

古手「まあ10分休憩してまた続きやるか」

一夏「おう」

2人はカタパルトデッキに戻った

古手「あら、織斑先生じゃんどうしたんですかこんなところで」

千冬「ああ、お前のデータ収集とちよつと様子見に来た」

古手「なるほろ・・・織斑先生1回俺と模擬戦いいですか？」

千冬「いいだろうお前の实力を見ておくしかないな本気で来い」

古手「了解」

一夏「大丈夫なのか古手？千冬姉と模擬戦するなんて」

古手「まあ自分の実力くらい見ておかないとね」

そういつて古手は機体を変更する

ティエ「どうする機体は？」

古手「ダブルオーライザー」

ティエ「いいのか？こんなところで見せて」

古手「本気で行かないとね」

ティエ「わかった」

機体を粒子化させ再構築する

千冬「またすごい機体だな」

古手「機体名ダブルオーライザーこいつは強いですよいろんな意味で」

千冬「わかった」

古手「じゃあ織斑先生お先に」

千冬「ああ」

古手は足をカタパルトに乗せる

古手「古手雅樹 ダブルオーライザー行きます！」

ランプが1個つつ消えて緑のランプが3つ光るそしてカタパルトが発射する

パシユ

千冬「さて、行くか」

ランプが1個づつ消えて緑のランプが3つ光るそしてカタパルトが
発射する

パシユ

2人は空に上がった

対織斑千冬（前書き）

ダブルオーライザー初登場！
スキル2は発動させませんよww

対織斑千冬

ダブルオーライザーで出た古手

目の前には打鉄に乗った千冬

そしてそれを見てる一夏達

一夏「大丈夫なのか古手？」

第「あいつの事だから大丈夫だろう」

一夏「そうだな」

千冬「いくぞ」

古手「はい！」

ランプが消え開始のランプが光る

それと同時に両者接近する

ドン！

ガギン ガギン

打鉄のブレードとGNソード2がぶつかり合う

古手は1回離れてGNマイクロミサイルを放つ

ドン

しかし千冬はこれをスイスイよける

千冬「あまいな」

古手はスキを入れずGNソード2からビームを放つ

ビュンビュン

千冬はこれも避けようとしたが先読みされ当たってしまう

古手「ラッキー先読み成功」

千冬「くっ」

千 C E 1 4 0 0 8 0 0

古 CE2500

古手「織斑先生大丈夫ですかー？」

千冬「ああ、大丈夫だ」

古手「それじゃあ行きますよ」

ドン！

ガギン ガギン

古手「やばいなあこれは・・・」

剣だと千冬有利であるが機体性能で助けられてる

千冬「スキありだぞ」

古手「しまった！」

ドカツ

千冬は古手のおなかダブルオーだとコックピット辺りにキックを入れた

CE / 2500 2000 1500

古手「よいいけるな スキル1ツインドライブシステム！」

千冬「なにっ」

一夏「ツインドライブシステム？」

箒「なんだそれは？」

千冬『管制室にあるから、みてこい』

管制室

一夏「ついた」

箒「どこにあるんだ？」

一夏「これが」

箒「どれだ？」

一夏「ツイン・・・ツイン・・・あつたこれが」

箒「えつと・・・HP50%以下の場合、ブースト使用時間増加、機動、攻撃力増・・・なるほど」

「夏「ブーストと機動攻撃力増という事か」

アリーナ

ガギン

千冬「（ツインドライブシステムで機動力、攻撃力があがったか）」

ガギン

千冬「はっ！」

千冬が垂直にブレードを振る

が古手は左回りに回転し千冬のCEを削るに

800 1000

古手「じゃあこれで終わらせて寝るか 行きますよ？織斑先生？」

千冬「ああ、」

ガギンガギン

千冬は連続技のように匠に剣を振る

千冬「！ここだっ！」

千冬の剣が古手のCEを0にさせようとした時

古手「ところがギツチョン！スペシャルアタック発動！」

千冬「なんだと！」

そのとき千冬の打鉄が固まった

一夏「何だあれは！」

第「必殺技・・・スペシャルアタックと言ったな・・・

一定距離をダッシュして1つの敵に攻撃を加える必殺技です。必殺技発動中には敵の攻撃を受けない無敵モードになります

ほかに全弾発射型必殺技、マップ兵器型必殺技

があるそうだ発動にSPゲージ100？必要・・・だそうだ」

一夏「すごいな」

2つの0の光がダブルオーライザーの後ろに出来そこからライザーソードをやり最後にGNソード？で攻撃し終了

千冬のCEを0にしたところで終了しカタパルトデッキに戻る

千冬「すごいなそのMSISは」

古手「多分この世界最強だとも思いますよ」

千冬「ふっ・・・そうだな」

一夏「すごいな古手！千冬姉に勝っちゃうなんて」

篤「そうだな」

古手「いや、この機体のおかげだよ」

一夏「なあ、俺達にもスキルって使えるのか？」

古手「んーできないことはないんじゃない？
ただ織斑先生とか国がなんていうか・・・」

千冬「ああ、それなんだが・・・」

古手「？」

千冬「お前のMSISは所属国家はない」

古手「なるほどねオバテクすぎるからね」

千冬「そういうわけだ」

古手「まあでもスキルのやつを教えたら崩壊するからだめだな」

一夏「えー」

古手「アキラメロ」

一夏「わかった」

古手「そつだ、織斑先生」

千冬「なんだ？」

古手「明日整備室借りてもいいですか？」

千冬「良いがどうするんだ？」

古手「ハロ作ります」

千冬「ハロ？」

古手「ハロ」

千冬「どういうものだ？」

古手「まあ和むかな後は回避運動などMSのサブパイロットから専属の小型ロボットによるメンテナンス活動など、あらゆる面をこなす独立型マルチAIとしてかな」

千冬「すごいなそれは」

古手「まあ俺の場合は和みとメンテナンスだけだけだね」

千冬「ほう・・・興味深いな」

古手「織斑先生だけでしたら1こ作りますけど？」

千冬「いいのか？」

古手「まあその代わりとなんだが絶対に解体とかいじくらないでくださいね」

後は生徒に持っていかれなくてください専用の台も作りますから」

千冬「わかった」

古手「さーて工房工房」

古手は自分の部屋に戻った

千冬「お前まだいたのか」

篝・一夏「俺ら（私達）を忘れないでください」（なみだ目）

そっいつてみんなはアリーナを後にした

整備室でのある出来事

翌朝 土曜日

現在整備室に居るのだが・・・じっと見られてる・・・

名前は・・・確か更識ひらしき 簪かんざしだっけ

古手「・・・何か用かな？」

簪「え・・・いや・・・なにも・・・」

古手「そこに居ると気が散るんだけどね」

簪「ひゃあ・・・ごめんなさい・・・」

古手「まあみてもいいよ」

簪「・・・はい」

古手「そういえば自己紹介まだだったね多分知っているとおもつが
古手雅樹だ、よろしく」

簪「更識 簪・・・です・・・」

古手「どうもよろしく」

簪「何作ってるんですか？」

古手「ハ口」

簪「ハ口？」

古手「ああ・・・見てみればわかるよ」

簪「うん」

赤ハ口「ハ口！ まさきヨロシクネヨロシクネ」

古手「できた」

簪「すごい・・・これがハ口・・・」

古手「ああ、こいつがハ口だ」

簪「何で作ったの？」

古手「こいつには回避運動などMSのサブパイロットから専属の小型ロボットによるメンテナンス活動など、あらゆる面をこなす独立型マルチAIとして使う」

モチロン演算とかも出来る」

簪「そう・・・なんだ・・・（ハ口の演算とか使えば・・・）」

赤ハ口「ヤメテーヤメテー」

古手「そうだな後もう1個作って
ついでに機体整備でもするか」

黒ハ口「ハロマサキヨロシクネヨロシクネ」

古手「できたティエリア」

ティエ「何だ？」

古手「ダブルオー展開」

ティエ「了解ダブルオー展開」

古手の周りが光りだしてダブルオーになる

簪「・・・ダブルオー・・・」

古手「さーてどこからやろうかな」

そうすると古手はダブルオーから降りてパソコンをカタカタさせる

簪「これが・・・ダブルオー・・・」

古手は簪のつばやきをスルーしパソコンをカタカタさせる

古手「大体このぐらいかな」

赤八口「ハロマサキジカン、マサキジカン」

古手「まじかもうこんな時間か それじゃ」

赤八口・黒八口を持って整備室を出る

古手はそうすると片付けて整備室を後にする

古手「それじゃ 赤八口いくよ」

赤八口・黒八口「バイバイ バイバイ」

簪「……はじめての人に声かけられた……」

職員室

千冬「これが八口か……」

黒八口「チフユ ヨロシクネヨロシクネ」

職員室に居る周りの先生が驚く

古手「これが専用の台です」

赤八口「ヨロシクネヨロシクネ」

古手「じゃあ渡しましたよ黒八口」

千冬「ああ」

古手「委員会にも行ったらそれ自爆しますから」

千冬「なんだと！」

古手「冗談ですよ」

その日の夜

自室でパソコンをカタカタやってるが

やけに騒がしい

古手「なんか騒がしいな」

古手は廊下に出ると鈴が居た

古手「どうした？」

鈴音「なんでもない・・・」

古手「（そういえば原作でケンカのシーンあったな）」

それを思い出した古手

古手「鈴音良い事教えてやる」

鈴音「？」

古手「一夏にこう言え、クラス対抗戦で
勝ったら1つなんでも言う事、ってな」

鈴音「！・・・そうねその作戦イタダキ」

古手「じゃあ俺は寝るからあまり騒がしくするなよ？」

鈴音「わかってるわよ」

ボタン

古手「さて原作どおりに進めばいいけど」

ティエリア「そうだな・・・」

こうしてクラス対抗戦の日を迎える

クラス対抗戦

クラス対抗戦 当日

アリーナは漠然と盛り上がっていた
しかし古手は学園の屋上に来ていた
なぜなら古手は束から送られてくる
ゴーレムを待っていた。

屋上で古手はモニターをみて一夏の試合を見ていた

古手「おー一夏がんばってるじゃん」

ティエ「ああ、そうだなあそこで回避していればまだいけるとおも
うのだが

鈴のIS 甲龍（シェンロンノこつりゆう）の衝撃砲で手間取つて
るようだ

古手「まあいけるとおもう」「ピピピピピピピピピピ」来たか

ドゴーン

古手「アリーナのシールド壊したらいくよ」

ティエ「了解 機体は？」

古手「いつもどおりで」

ティエ「わかった」

アリーナ 一夏・鈴サイド

鈴「今すぐに」手加減してください」って言えば手加減してあげてもいいよ」

一夏「それだと意味がない、俺の本当の実力を見ておきたい」

鈴「そうなんだ、わかった本気でいくよ!」

ランプが3つ消え開始のランプが光る

鈴・一夏「はあああああ」

それと同時にブーストをかける

鈴「あまいね!はっ!」

鈴からの右ストレートが入る

一夏 C・E1400 C・E1000

一夏「400も削られた!」

一夏「このっはあぁっ」

一夏の剣(雪片二型)が鈴の脇へと入る

鈴 C・E1400 C・E900

鈴「やるね一夏!」

一夏「鈴もな!」

2人が同時に接近戦をかけようとしたとき

ドゴーン!

一夏「なんだ!?!?!っ!鈴危ない!」

ひゅん

一夏は鈴を抱えて回避する

鈴音「ちょ!いつ一夏どこ触ってるのよ!それと何よあれ!」

アリーナ管制室

千冬「2人ともデッキにもどれ！先生方がそっちに行く」

一夏『観客の退避時間を稼ぐそのうちに早く！』

千冬「・・・わかった死ぬなよ？」

アリーナ中央

相手2機いて1機がビームを放ち移動する

ビュン！

一夏「こいつは・・・」

鈴音「ビーム！」

レーザーとは違いビームは一撃で半分以上も削られる
しかも相手の装甲も解ける場合もある

そしてズドンという音が聞こえた

一夏「何だこのおとは？」

鈴音「一夏あれ見て！」

そこには・・・ガンダム顔の黒い機体が出てきた

その機体は指とか口とかからビームを出す

ビュンビュンビュンビュン

一夏と鈴音は回避して時間を稼ぐが

そこに1本のビームが放たれようとした

そのとき

バリーン

ドツカーン！

上から5本のビームが降ってきた
そのビームは黒い機体に当たる

一夏「な・・・なんだ！」

鈴音「わからない・・・」

一夏「・・・っ！鈴あれ見ろ！」

鈴は一夏の指差した方に目を行く

鈴音「っ！あれは！」

鈴・「・・・フリーダム！」

そこにはフリーダムがいた

校舎屋上

古手「アリーナシールド破壊確認ティエリアいくよ」

ティエ「了解 ZGMFX10Aフリーダム」

古手「久々の武力介入だ本気で行く」

ティエ「了解」

ズドーン

古手はソラからアリーナ上空に向かう

古手「最初にアリーナのシールドを壊す！ハイマツトブルバースト
！」

ティエ「チャージ完了」

古手・ティエ「うおおおおおおおおおおお」

ズドドドドーン

バリーン

古手「開いた穴から突入する！」

一夏「なんてビームなんだ！」

鈴音「てかなんでフリーダムがここに！」

千冬『おまえら！デッキに戻れ！』

管制塔の千冬から通信が入る

一夏「でもまだ非難が」

千冬『大丈夫だ後はあいつがやる』

鈴音「あいつつて・・フリーダム?!」

鈴はなにかわかって話した

千冬「ああそうだいいから戻れ」

一夏『・・・わかった鈴もどるぞ』

鈴音「まだあいつが!」

一夏「鈴!」

鈴音「・・・」

2人はデッキに戻った

古手サイド

古手「2人はデッキに戻ったか」

ティエ「まさかここに現れるとはな・・・」

古手・ティエ「サイコガンダムとデュエルガンダム・・・」

両者にらみつける

古手「しかも両方ともA Rランクだぜ・・・」

ティエ「ステータスは・・・基本のままらしい」

古手「なら問題はないかなどうせ無人機だし」

ティエ「無人機なら問題はない」

古手「行くよ、ティエリア」

ティエ「了解」

ドーン

古手はいきなりレールガンを放ち勢いよくブーストをかける

次にビームライフルでけん制しながらSPをためる

1段階SPたまったところでスキル1のフェイズシフト装甲を発動する

相手も反撃するがすいすい避けられてしまう

そしてSPゲージが満タンになったころ
相手はまだHPゲージが残ってるらしい

古手「そろそろ決めるか」

ティエ「ああそうだな」

古手「スペシャルアタック発動！」

古手はサイコとデュエルASをまとめてやるそうだ
アサルトシミュラード

2機の間にはオレンジ色の球体が出る

2機は固まってフリーダムからのハイマッドフルバーストを食らう

ズドーンズドドドドドドドドド

2機は爆発して砕け散ったゴーレムは先生たちがやっいたらしい
そこに千冬から通信が入る

千冬『おいフリーダムのパイロットそこにあるカタパルトデッキに
来い』

と言って通信をきられた

古手「だってさ行くしかないか」

テイエリア「ああそうだな」

カタパルトデツキ

一夏「すげえ……あれがフリーダム……」

鈴音「白騎士事件のときに居たIS」

千冬「スピード・攻撃力・防御力・反射能力・フリーダムはすごいな」

一夏「千冬姉！」

ゴツン！

千冬「織斑先生だ馬鹿者」

一夏「いてて……」

鈴音「こっちにくる」

鈴は身を構える

千冬「大丈夫だ、あいつは見方だ」

鈴音「それはどういっ……」

ズシン

フリーダムがカタパルトデッキに着くそして3人のところへ向かう

そして一夏を中心に正面に立つ

千冬「お前らこの顔に見覚えはないか？」

一夏「顔？だって白騎士事件のときに居たフリーダムだよな？」

鈴音「うん、そうだね」

千冬「織斑、ほかに覚えはないのか？お前は1回戦つかてはあるぞ」

一夏「そうなのか?!」

鈴音「わからないらしいです」

千冬「・・・しょうがない顔はずせ」

そういつて顔のところを外す

一夏「あ！ふ・・・古手じゃないか!」

鈴音「ちょっと！何やってるのよ！」

古手「何ってｗｗ見てのとおりだよ」

千冬「まあこれで白騎士事件の片割れが判明したわけだ」

一夏「と言う事はお前俺よりか先に動かしてたってことか」

古手「そうだけど公式だとお前が先だ気にするな」

千冬「さて私と古手はちょっと話があるのでな」

このことは話したらどうなるかわかってるよな？」

一・鈴「ハイ……」

しかしすぐにはれるのは時間が早かった

取調室（前書き）

最後に機体の紹介をしようとおもいますw
古手が持つてる機体など紹介していきますのでマツテテネw

取調室

学園地下30メートル レベル5

千冬「さて、聞きたい事はわかってるよな？」

古手「そうですね、じゃあこの機体サイコガンダムから」

千冬「サイコガンダム・・・」

古手「まあこいつをみてくれ」

古手はディスクを入れモニターをつける

千冬「こいつは・・・さっきの黒いやつか・・・」

千冬はモニターを見てサイコガンダムを見る
ついでにティエリアも呼ぶ

古手「はい、こいつはサイコガンダムこいつは今回スキルは発動なかったのですが

説明しておきます」

千冬「ああ」

古手はモニターにサイコガンダムのスキルを表示させ説明する

古手「まずスキル1のフィールド（アイフィールド）

こいつはビーム系など軽減する大体75%ぐらい」

千冬「なるほど高いなそれに対抗できる我々の機体は？」

千冬は軽く考え質問をする

ティエ「デュノア社製ラファール・リヴァイヴ」

ティエリアは即答をした

千冬「というと実弾系か」

古手「正解 実弾には弱い 俺が使ってる機体で実弾持ちはこいつだ」

古手はある機体を表示させる

千冬「何だこいつは？」

古手「ガンダムヘビィアームズ改（EW）だ 織斑先生ステータスを見てください」

古手は指し棒を持ち千冬にステータスを見るように言う

千冬「攻撃力がちょっとあるのと防御が高いのになしか見えないのだから？」

ティエリア「まあまあ『変形前』はそうだな」

千冬は『変形前』と言う言葉に反応したが武装を見る

千冬「武器は・・・なんだ武装がほとんど射撃しかないじゃないか」

古手「変形後はすごいことになりますよ ポチットな」

ヘビィアームズが変形後になる

千冬「げっ・・・こいつは・・・」

古手「先生こいつの別名わかります？」

古手が千冬に質問をした

千冬がヘビーアームズを見る

千冬「歩く弾薬庫だな」

古手・ティエ「正解」

古手「さて、話を戻すけどこいつは格闘アーマーがある」

千冬「格闘アーマー？それはなんだ？」

ティエリア「格闘アーマーは例え相手から格闘とかやっても反撃は可能ってやつだ

例に例えると格闘で挑んでもやり返されるだけってことだ」

千冬「なるほど」

古手「まあそれがさっき教えた変形後のヘビーアームズ改にあるってわけだ」

千冬「ということは変形したら弾切れ起きるまで射撃続けるってことだな？」

古手「正解、まあ弾のリロードがあるからちょっとしたらまた撃ち続けるけどね」

千冬「なるほど」

古手「さて次なんだが スキル2鉄壁EX これが厄介だ」

千冬「その名のとおり硬くなるのか？」

ティエリア「そうだしかも防御力は元々高いからめんどくさいが、
へビAEWには鉄壁

ついてるからへビAは大丈夫だが」

千冬「こっちが持たないと」

古手「そういうことださて次の機体だが」

千冬「デュエルガンダムと言ったが」

古手「ああ、デュエルガンダムそして外の武装がアサルトシュラウド・・・」

千冬「覆うもの死体を包む衣 か」

古手「これを俺はデュエルガンダムアサルトシュラウドと読んでる
そのまんまだけどな」

千冬「こいつをなんていうんだ？」

千冬は方のレールガンを目指す

ティエリア「そいつはレールガンの シヴァ です、反対側にある
のはミサイルポッドだ」

千冬「ほうこれはすごいな」

古手「デュエルASアサルトシミュラトの基本武装は

右手にビームライフル

左手にアンチビームシールド

後は顔のところにイーゲルシュテルン・

簡単に言うと威嚇射撃とかに使うやつバルカン

背中にはビームサーベル2本・・・

スキルは老練なスナイパーと精密射撃

使えるのはビームライフル・サーベル・シヴァの3つ

ちなみにデュエルがGATシリーズの中のベースになった機体です」

千冬「GATシリーズというのは？」

古手「シリーズの機体は合計で5機

まず1つベースのデュエル主に格闘がメインかな」

千冬「白兵戦が基本か」

古手「そして次にバスターガンダム、バスターは射撃に特化した機体です」

千冬「射撃専門か」

古手「そうですね次にブリッツガンダム」

千冬「ブリッツ・・・電撃か」

古手「はい、ブリッツは曲者ですねスキルはフェイズシフト装甲とオートロックオンジャマーEXですね

そして曲者の理由はミラージュコロイドとオートロックオンジャマ
ーEXこれがメンドクサイですね」

千冬「オートロックオンジャマはわかるがミラージュコロイドは
何だ？」

ティエリア「ミラージュコロイドは3分から5分消えることが出来る
ちなみに古手のデスサイズヘルとは違うシステムを使ってる」

千冬「そのシステムは？」

千冬は古手の方を向き問う

古手「言えませんねこれは」

千冬「・・・わかったそれで次は？」

古手「次の機体はイージスガンダム」

千冬「イージス・・・ギリシャ語だと防具か」

古手「そうですね、イージスのスキルはSEED覚醒とフェイズシ
フト装甲

そしてイージスには今までとは違う機能があります」

千冬「その機能はなんだ？」

ティエリア「・・・変形システムというやつだ」

千冬「変形システム？」

古手「こいつはM.A・・・モビルアーマーに変形が出来るんですがその代わり
防御力が低くなりますしかし変形したおかげでスピードが上がります」

千冬「あたればどおってことはないという機体か」

古手「まあそうですねそして最後の機体ストライクガンダム・・・」

千冬「ストライク・・・攻撃か」

古手「そうですね、ストライクのスキルは機動力アップとフェイズシフト装甲

・・・しかしストライクには最大の特徴、ストライカーパックシステムがあります」

千冬「ストライカーパックシステムか」

古手「はい、ストライカーパックにはエール・ランチャーソードの3つ

そしてそのストライカーパックごとにスキルも変わります」

千冬「なんだと！」

ティエリア「エールストライカーには中距離の装備

ビームサーベル・ビームライフル・バルカン

スキルはリロードアップとフェイズシフト装甲・・・ですがエールにはもう1つ別があります」

千冬「別に機体があるのか？」

古手「はい、ムウ・ラ・フラガ専用エールストライクガンダム
これはその機体の名前ですね
こいつにはバルカンの代わりにバズーカが装備されています
そしてスキルはフェイズシフト装甲・そしてユニークスキル・
エンデュミオンの鷹」

千冬「ユニークスキル・・・か」

古手「ええユニークスキルはたとえば
俺の機体デスヘルハイパージャマーECMというスキルみたいな感
じですね」

千冬「なるほど」

古手「ユニークスキルも全てあの中に入ってるので後で確認を」

千冬「わかった」

古手「じゃあストライカーパックの続きですが
次にソードストライカー名前のとおり接近戦装備足から頭ちよつと
上ぐらいの

対艦刀・とブーメランだけです
が野球のスイングみたいな振り方な
のはメンドクサイです
理由はそれを受けるとブーストダウンをします
ブーストダウンすると緊急回避みたいなのが

5秒から10秒できなくなります
そしてブーメランにはスローの効
果があります

スローはちよつとづつ動く効果は3秒」

千冬「厄介だな効果というものは」

ティエリア「そうだな、そして最後のストライカーパッケ ランチャー
ヤーストライカー」

ランチャーはその名の通り遠距離型でスキルは防御力アップとフェ
イズシフト装甲

肩にバルカンがありますが移動射撃なら10セット停止射撃なら3
セット

そしてアグニには貫通属性、貫通属性は変形後のイージスにも付い
ています

まあアグニは1発しか撃てないのでリロードが7秒ですが外部電源
繋げると

連射は可能ですが攻撃力は高い方ですがシールドがないため防御力
が低いですね

本当に後方支援型に作られたやつですから」

古手「以上が説明と報告です」

千冬「そうか・・・わかった、そういえばフェイズシフト装甲と言っ
のは何だ？」

古手「スキルにも持ってますが・・・まあいいか

フェイズシフト装甲は実弾に対する防御力が上がります」

千冬「なるほど・・・ありがとう」

古手「さて・・・」

古手はそういうとネックレスをデュエルガンダムとサイコガンダムに向けた

そうすると2機は消え古手の機体倉庫の中に入れられた

千冬「！何をする」

古手「この2機を委員会に報告するとバランスの崩壊が待ってますから
それを回避したまでです

千冬「わかった、だがどうする？あっちには見られてるが？」

古手「そしたら委員会にこう言っておいてください

「この機体は私が預かりますこれは私に与えられた仕事なんで」と
ね

千冬「その仕事とは何だ？」

古手「言えませんよどうせ信じてはもらえないから」

千冬「お前が言いたくなければそれでいい」

古手「ありがとう御座いますお礼とは言いませんがお約束のレッド
フレームです」

そうすると古手は赤い小さい刀のキーホルダーを千冬に渡した

千冬「ああ、ありがとう」

古手「じゃあ私はこれで」

そうすると古手は地上に行くエレベーターに向かった

取調室（後書き）

こんにちは作者ですwwおまたせしましたww

そしてとうとう勝手に機体やらかしたww

千冬専用レッドフレーム

外見武装は通常のレッドフレームと同じだが

スキルのみ違う

スキル1 機動力アップ

スキル2 ユニークスキル（未定だが攻撃力アップ系）

サポートでハ口にも装着可能

ハ口に装着させるにはハ口と一緒にIS起動ということw

次回から古手が持つてる機体を教えちゃいますww

バレタ 自由の機体

さて事情聴取も終わったところで
寮の食堂に戻ってきたのだが・・・

古手「視線が痛い・・・」

四方六方八方から視線が飛んでくる

古手「なんだなんだ？」

わけがわからない

そして偶然ご飯食べてる一夏と箸を見つけた

古手「お、一夏と箸みつけ、なあ一夏」

一夏「げっ・・・お・・・おう古手どうした」

古手「なあ四方八方からの視線が居た痛いんだけどww何で？」

古手は笑いながら言うがしかしそこで予想外の爆弾発言が来る

一夏「あのさ・・・古手・・・」

古手「んー？」

古手はそーい！お茶を飲んでる

一夏「お前がフリーダムに乗ってる事バレタらしいぞ」

(〇、ー、ー、ー) ・ * ; ; ; ; 、 ブツ 古手

古手「ゲッホゲホwwwまじかよwwwはえーなおいwww」

篤「ああ、私達がここに着いたころにはもう」

古手「まあ大体わかってるのが1名いるけどな」

そつすると古手は入り口にある近くの窓に行った

そこには2年の新聞部の1人 黛 薫子という人物が居た

古手「一夏こいつが犯人」

「一夏・篝」あー……」

黛「あの一……私って大変な事しちゃいました？」

古手「うん……そうだね……ある意味国家機密ほどの大変な事だね」

と言いながら古手は今にもため息が出そうな顔で言う
そして古手はケイタイを取り出す

oooooooooooo

古手「もしもし織斑先生ですか？」（黛が逃げようとする）

千冬『どうした？』（古手が服を後ろからガシッと持つ）

古手「自由の事ばれました」（薫はじたばたしてる）

千冬『……わかった』（古手は近くにロープがあるから一夏にパシリする）

古手「それで今ばらした犯人今捕まえてるんだけど、

どうすればいいですか？」（一夏がロープをとってくる）

千冬『今からそっちに行く』（古手はぐるぐる巻きつける）

古手「了解」（拘束終了）

ぴっ

古手「と言う事だ聞こえたよね・・・先輩？」

黛「コクコクコク」

古手「じゃあおとなしくしてくださいね」

4分後

千冬「こいつが犯人か」

古手「そうですね」

千冬「時期にバレルとおもったのだが早すぎるな」

古手「そうですね このおとしまえどうしよっかな」

薰子「命だけはお助けを・・・」

古手「まあフリーダムだけならいいが俺の顔が写ったらいけないよね 言いたい事わかってるよね？」

薰子「・・・ハイ」

千冬「さて・・・大変な事になってしまったな古手」

古手「しょうがないですよ時期にこうなる事はわかっていますからしかし・・・」

千冬「ああ・・・」

古手「多分俺の予想なんですけど絶対に俺の機体を盗もうと考える人がいっぱい来ますから対策考えないと・・・」

千冬「そつだな・・・」

そこで古手がひらめいたようだ

古手「織斑先生 この学園のどこかに俺専用の工房作っていいですか？」

千冬「バレナイところがあるのか？」

古手「ここですね」

千冬「なるほどそこなら大丈夫だな」

古手「じゃあ、この後はお任せしますので」

千冬「ああ、わかった」

こうして自室に戻った古手であった

夢の中

古手「あれここは・・・」

神「よっ」

古手「おー神様おひさーw」

神「大丈夫のようだな」

古手「とりあえずは生きてる」

神「そうかまだSEEDとかはつかつとらんみたいだな」

古手「まあとりあえずな、多分これから使うとおもつ」

神「そうか・・・まあこれからが大変だぞ」

古手「了解 あれだろこれ下手したらゲーム内の全機体出てくるんだろ？」

神「そうじゃなそれを回収してもらえればいいのじゃ」

古手「まあ何とかなると思うがM S I Sの装甲とかをI Sにできるようにして

あと全てのストライク系統と全てのストライカーパックはこっちの手持ちにして
ついでに専用の工房も」

神「しょうがないやつじゃのうこれ以上はないと思え」

古手「了解」

神「じゃあまたのー」

oooooooooooo

カチッ

古手「・・・もう朝か」

ティエリア「おはよう」

古手「おはようさん」

古手は制服に着替えてバックを持ち食堂に行く

古手「おはよー鈴音・一夏・篝」

3人「おはよー」

古手「やっぱ昨日の今日だから視線がいてえ・・・」

篤「しかたないだろう」

一夏「ああ、しかたないな」

古手「・・・そうだな」

ティエリア「古手、ストライク系統の機体が見えるようになった
後工房も出来てる」

古手「了解ー」

一夏「なあハ口ってなんだ？」

ティエ「ハ口は回避運動などMSのサブパイロットから専属の小型
ロボットによる
メンテナンス活動など、あらゆる面をこなす独立型マルチAIとし
て使う
モチロン演算とかも出来るやつだ」

一夏「聞いてみるだけだとすごそうな機械だな」

古手「いや、案外かわいいものだよ」

一夏・篤・鈴音「かわいいもの？」

古手「見てみるか？」

3人「もちろん」

ガサゴソガサゴソ

古手「ホレ」

ハロ「ハロハロ イチカ ホウキ インリンヨロシクネヨロシクネ」

そこら辺に居た近くの人「か・・・かわいいい！」

古手「うわっwww」

「ねえねえこれ古手君が作ったの？」

「うああ・・・かわいいwww」

「かわいい物には罪にはならない！かわいいは正義だ」

古手「やべえ・・・じゃあ一夏達俺は先に」

一夏「おう、またな」

古手はハロを回収して教室にいくのであった

山田「今日は転校生を紹介します今回は2人です」

千冬「入れ」

ガラッ

(。°。°。)・・・、ブツ 古手

「へっ?・・・ま・・・雅樹!？」

古手「おま・・・シャル・・・なんているの?ww」

千冬「なんだ古手、シャルル・デュノアと知り合いか?」

古手「シャルル・・・ハイ知り合いですww」

千冬「ならちよつどいい、デュノアはお前と相部屋になるお前が面倒見てやれ」

(…^ ^)…

古手「マジでいってるんですか？」

千冬「ああ、マジだ」

古手「……了解」

千冬「デュノア挨拶だ」

シャル「シャルル・デュノアです、まさ……古手君と一緒にもう
1人男性で動かせると聞いたので」

「え？男？」

シャル「はい」

そこでシャルは古手のほうを向いた
古手は耳をふさげと動作した
シャルは同じことをした

「……キャアアア」「」「」

「3人目よ3人目」

「美男子3人目かー」

千冬「おい静かにしろ馬鹿者」

静かになったさすが千冬先生

千冬「次ラウラ自己紹介してやれ」

ラウラ「分りました教官」

千冬「今は織斑先生だ」

ラウラ「わかりました」

ラウラ「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

古手「それだけ？」

ラウラ「以上だ・・・お前が織斑一夏か」

一夏「ああそうだが」

そこに一夏の頬に振ろうとしたがされなかった

パシン

古手「ラウラ・ボーデヴィツは何をしている」

ラウラ「それはこっちのセリフだが？」

古手「俺はお前が一夏にビンタしようとしたのを先読みしてとめただけだが？」

ラウラ「ッ！・・・キサマ何者だ？」

古手「・・・3年ぐらい前か・おまえドイツの戦場で1回やられそうになったな」

ラウラ「・・・それがどうした」

古手「そのときは4対1の時だったな・援軍はまだ来ない
お前は右肩のレールガンをぶっ放すが当たらないそこにミサイルが
1本・・・

飛んできてアポーン・・・にはならなかった」

ぶんっ

ラウラは古手の手を振り払う

古手「そこに1機の機体が上から来る何だと思っ？」

ラウラ「・・・フリーダム」

古手「ああそつだそしてそのパイロットが目の前に居る・・・」

千冬以外全員「!?!」

古手「いやお前ら昨日知つただろ?」

ラウラ「あの時の援護は感謝するしかしこれは別だ

私はあの人の弟としていることを認めない」

そついつてラウラは席に着いた

千冬「はぁ・・・さてSHRをはじめ今日はーーー」

千冬「ーーということだこれでSHRを終わる

シャルル「あ、織斑くんだっけ僕は・・・」

一夏「ああちよつとまった1時限目はそとだから俺らはアリーナで
着替えないといけない」

古手「ああ女子が着替える前に行くぞ」

古手「さて一夏・シャル ダッシュで行くぞ」

一夏「ああ」

古手「こつちだ」

シャルルの手を引っ張る

シャルル「う・うん」

古手「げっ・・・やっぱり来るか」

「あ織斑君と古手君と転校生だ」

「居たぞ者度もであえであえ」

ここはいつから武士の家になった・・・

古手「しょうがない一夏こつちだ！」

古手はシャルルをお姫様抱っこする

一夏「ああ」

古手「背中をやっただけ展開しろ」

「キャアアア」

「お姫様抱っこよお姫様抱っこ」

「フッフ・・・今月新作はこれね」

古手「さて・・・どうにか逃げれたが間に合つかぎりぎり」

一夏「ああ行くぞ、間に合わなくなる」

古手「1時限目からさすがにたたかれたくないな」

一夏「ああそうだな」

シャルル「／／／／／」

顔真つ赤にするシャルル

古手「ああすまんもうちよつとの我慢だ」

シャルル「う・・・うん」

第3アリーナ更衣室

一夏「ぎりぎりかな」

古手「ああそうだなシャルルは反対で着替えるよ」

一夏「このスーツ引つかかるんだよな」

シャルル「ひ・・・ひっかかる・・・／／／／」

古手「ナに考えてたのかな ニヤニヤ」

シャルル「な・・・なんでもないよ!」

古手「さて着替え終わった事だし行きますか」

シャルル・一夏「うん」おう」「

千冬「今日から実践的に行う セシリア・凰 鈴音 前に出る」

まあ見世物じゃない事はわかってるな

そして・・・

セシリア「この私イギリスの代表候補生のセシリア・オルコット
がお相手しますよ」

鈴音「代表候補生の实力を見せてあげるわよ！」

やっぱり物に釣るよな本当に・・・

千冬「何か言ったか古手？」

古手「イイエナンデモアリマセン」

セシリア「お相手は誰ですか？」

千冬「相手は・・・」

「ひゃあああああああああ」

一夏「おわあああああああっ」

ドゴオオオオオオオオオオ

一夏「むっ……」

山田「織斑君……織斑君そろそろどいてもらわないと……いやこのままでもいいのですが……
やっぱり先生と教師は……」

セシリア「あらあらずしてしまいましたわ」

鈴音「いーちーかー」

びゅん

双天そつてん牙月がげつを投げるが

ドンドン

山田「織斑君怪我はないでしょうか？」

一夏「え……ええ大丈夫ですありがとうございます」

千冬「まあそれはともかく山田先生おねがいします」

鈴音「2対2のほうが良いじゃないの？」

セシリア「そうですねそれだとフェアじゃありませんわ」

一夏達の授業はまだまだ続く・・・

バレタ 自由の機体（後書き）

作者 さて今回紹介する機体はこちら

デデン

フリーダムガンダム

スキル1フェイズシフト装甲

対実弾防御力アップ

スキル2Nジャマーキャンセラー

ブースト無限上になるときだけブースト使用

武装

1 ビームサーベル

2 ビームライフル

3 腰の折りたたみレールガン

4 スペシャルアタック

武装はこのぐらい

され、では次回またお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3354x/>

転生先はインフィニットストラトス（リメイク）

2011年10月29日00時47分発行